錢取つて濱へ行く樣な者ぢやござんせんとてひんとする(最明寺殿)

弛んだ物の張るさまにいふ。氣張る。

***ひんぬき** あれあれあそこへ唄うて來る本小室のひんぬきは、與作與作と小手招き(丹波與作) 段模樣の染被・供の女が頰冠、御所のひんぬき二人が中へ怖氣もなくしやんと分入る(酒呑童子)

「ひきぬき」(引拔)の音便。拔萃。純粹。秀逸。中分無きこと。義經千本櫻・第二に、「夜半には雨もあがり、曉方には朝嵐にかはつて、御出船にはひんぬきの上上日和」。

ひんばくわ アレ頻婆果の唇が動くは人に告ぐる氣か(聖德太子繪傳記)

〔頻婆果〕果樹の梵名、Bimba. 譯して相思といひ、其果林檎に似る。慧苑音義下に、「頻婆果、其果似此方林檎、極鮮明赤也」。

びんび 過ぎ逝かれし親父の咄に、鼻紙びんびと遣ふ者は曲者ぢやといはれしが(冥途飛脚)

けちけちしないことにいふ副詞。ぱつぱ。どつさり。

びんびしゆ 茂兵衞は早天より、暦配りて先き先きの、びんび酒の麴の花、ちろちろ目にて立歸り(大經師)

「美酒」を「びんび酒」と調子づけていうたのであつて、「ごり」(鯀)を「ごんごり」(その條を見よ)といへる類である。

びんみづいれ この櫛箱に燒物の鬢水入、これ氏神と三度いただき(冥途飛脚)

〔鬢水入〕陶器或は塗物或は竹製もあつて、其形楕圓形で厚さ一寸ばかり(寶曆頃の物は更に大形にして厚い)、小判金を重ねたやうな狀をなす。これに伽維油を入れ、或は南五味子の莖を細かく削つてこれに浸し置いて、そのねばり汁で毛髮のそそけを理め艶を出したのである。鬢水入をその形の似てゐるより小判に見立てた例は、既に西鶴撰の好色盛衰記・卷二、見ぬ面影に入舞大臣の條に、小判を貰つたことを記して、「前窓より手を出して、鬢水入の底のやうなる黃色の物を一枚づつ給はりける」と見え、傾城太太神樂(寶永二年刊)卷四に、「小判は鬢水入の底やら、壹歩は瓔珞のちぎれたるのやら、知らぬ顏してゐらるる女郎も云云」と見えてゐる。三島曆卷之三に、「竹のびん水入一、かみそりばこ一、ありまより持參り候」、とあれば竹の鬢水入もあつた。

ひんよえい 時に麓の山どよむ木遣に法のひんよえい(萬年草) 七尺餘の靑目の石かろがろと提げ、肩へ上げてひんよえい(扇八景)

木遣唄の掛聲。(奴が行列道具を振つて練り行くときにもこの掛聲をした。)

ふ

***ぶ** オオ殿樣の御勘當受け、ぶに首打たるる法もあれ(堀川波鼓) 此方も步を以てぶに首を提げらるるが悔みはないか(壽門私)

〔步〕卒。斬首を行ふ獄卒。壽門松のこの文は將棊の駒の步に獄卒をきかせたのである。橘守部撰・俗語考に、「今の世に夫とも人足とも云物は古くは丁といへり」。

ぶいぶい 坂東者のどう强く、何さぶいぶいども人嚇の腕に色色の彫物して、喧嘩に事よせ懷の物取ると聞き及ぶ(女殺)

ぶつくみて不平をいふさま。ぶつぶついふ愚鈍者。

ふうしつ 臣が病は白虎歷節とて、白き虎の五體節節食ひ切るに譬へ、風しつ骨に入つて痛み堪へ難し(唐船噺)

〔風濕〕風寒濕熱。風寒とは、風氣寒氣の人體に中り、外方より疾病の因をなすものをいひ、また濕熱とは、人體内に發する熱氣の病因をなすものをいふ。

ふうぞく 月待つ夜半の管絃の御遊、風俗催馬樂朗詠も玉簾ふかき聲もれて(蛙合戰)

〔風俗〕風俗歌の略。國國の歌謠の中にて曲調よきを選んで上下の人々唄うたのである。體源抄に、「綸教訓抄云、風俗は諸國の古風を集むるなり、故に風俗多在催馬樂中、……雜藝今樣齎謠之詞、皆是風俗之流也」。

***ぶうぶう** 人間のぶうぶうを捻り殺すは此公時が好物(酒呑童子) 地體八めはぶうぶうなり、己が胸座しつかと取つて(丹波與作) 人の意見も馬の耳、よそふく風のぶうぶうにて、夜步き日步きとぼし立て(二枚繪)

「ぶいぶい」ともいふ、その條を見よ。「八めはぶうぶう」とは、馬方の名の八に蜂をいひかけ、蜂の羽音のぶうぶうをいひかけたのである「風のぶうぶう」とは、風の音のぶうぶう、即ち馬耳東風をいひかけたのである。

ふうりうぢん 勝つも負くるも風流陣かかれやかかれと(國性爺)

〔風流陣〕唐玄宗皇帝が楊貴妃と淸華宮に宴し、宮女を兩隊に分ち旗幟をもつて勝負せしめた故事で、これを櫻花と梅花とに見立てて花軍と云つた。天寶遺事に、「明皇酒酣、使妃子統宮使百餘人、帝統小中貴百餘人、排兩陣爲風流陣、巧擊相觸、敗者罰巨觥」。

***ふうりん** 敵は勇みの鉦太鼓、風輪火輪天地にあふれ、前後を忘じて行き方なく(日本武尊) 風輪の黼風穩かに(唐船噺)

〔風輪〕大地の四輪の一で、俱舍論十一に「先於最下依止虛空有風輪生、廣無數、厚十六億踰繕那」と見え、虛空卽ち空輪の上に風輪生じ、風輪の上に水輪生じ、水輪の上に金輪生じてゐる。轉じて風をいふ。

***ふえのくさり** 三刀四刀刺通し、返す刀に吭のくさりずたずたに切散し(賀古教信)

〔吭鏈〕のどぶえ。和漢三才圖會・卷十二、支體部に、咽喉は九節あつて、「吭有結喉、而咽喉管正中故與笛同訓、至要之器、史記所謂絕亢而死者是也」と見えてゐる、咽喉は九節あるによつて鏈といふたのである。

***ふかく** 堤の彌三が附くからはさまで不覺も取るまじきぞ(酒呑童子) よい事は無い筈と思はなんだは身の不覺(丹波與作) 鬼の腕を取りかやされ、それが無念な口惜い切腹せうといふやうな不覺人の渡邊に、逢うて何の用もなし(酒呑童子)

〔不覺〕覺悟の確ならぬこと。油斷。不調法。

ふかみぐさ 根は戀草の深見草、あ

さみ草とは思はじと（十二段）　しかも色香の深見草（生玉）

〔深見草〕牡丹のこと。箋注倭名類聚抄に、「牡丹。是草生二林叢中一、故名二布賀美久佐一」。十二段のこの文中、草の名寄であつて、深く見るを深見草にいひかけ、また生玉心中のこの文は、色香の深いを深見草にいひかけたのである。

ふかみどりや　萬年寺の同宿忍び戀路の摑み取り、ふかみどり屋の小丁稚（女腹切）

〔深綠屋〕「摑み取り」に韵脚を合せて屋號とし、萬年寺の萬年の綠で、松の深翠にきかせたのである。なほここの文は、戀に鯉をいひかけて摑み取りといひ、深翠の濃を小にかけて小丁稚というたのである。

***ふかん**　不堪の我等僅に父の箕裘を嗣いで（蛙合戰）

〔不堪〕不堪能。藝に堪能ならぬこと。古今著聞集卷十、馬藝の條に、「久清は上手なり、敦文は不堪のものなりければ」。

豐干禪師　豐干禪師が四睡の虎、李將軍は虎を組む（反魂香）　手飼の虎を枕にて親子三人まどろめば、虎も旅寢の夢を見る、豐干禪師の四睡かや（國性爺後日）

傳燈錄、宋僧傳などに載れる高僧で、支那天台山國淸寺に住み、弟子に寒山と拾得とある。豐干禪師が四睡とは、豐干と寒山と拾得と虎と皆睡れること。下學集・歡量門に、「四睡。寒山・拾得・豐干・虎、四個相依打睡、其趣可レ愛、後人寫以爲二四睡圖一、三人卽文殊・普賢・彌陀散聖也」。（序云、有名な因陀羅の繪は四睡しないで、豐干禪師念珠を握り、口を開いて饒舌せうとし、虎柔順にその傍にゐる。そして寒山・拾得便便たる腹口を開いて大に笑つてゐる。この繪の寫眞は明治二十五年八月出版の國華第三十五號に載つてゐる）。

ふきのしうとめ　萠ゆる女萎摘む若菜摘む、茅花・杉菜にさいたづま、妻は誰が妻老いぬれば蕗の姑（雪女五枚羽子板）

〔蕗姑〕蕗の薹をいふ。増補俚言集覽に、「ふきのしうとめ。大和の方言にてふきのたうを云」。

***ふきびん**　綠のふきびん嬋娟として八字の細眉宛轉たり（天智天皇）

〔吹鬢〕鬢を脹らかにした結髮。井原西鶴撰・俗つれづれ卷四、御所染の袖色ふかしの條に、「ふきまへがみ。くじらのひれのまがりたる物を入てかみのうごかぬやうに」と見えてゐるから、吹鬢も鬢に鯨の鰭を入れて脹らしたものであらう。

ふきや　蒔いても蒔いても育たぬは、己れがどこぞに銅の吹屋が住んださうなとて（冷泉節）

〔吹屋〕槖鑰を以て鑛を鍛錬するを吹くと云ひ、鑛を吹分ける家を吹屋といふ。吹屋のあたりは鑛毒流出して不毛の地となる。源氏冷泉節のこの文、女の孕まぬを鑛毒ある不毛の地に喩へて洒落たのである。

***ふきやうぼさつ**　（百日曾我）

〔不輕菩薩〕常不輕菩薩の略。もと一比丘であつた時に身に不輕の行をなし、口に不輕の敎を宣べ、謙遜の德を備へて、見る所の人人を悉く禮拜讃歎された。かく人の本性本心の輝きを讃美された德によつて、自身も菩薩になられたのであるが、往昔の威音王如來の時の菩薩であつた個方だといふ。この菩薩の因緣は法華經・常不經菩薩品に詳說してある。

ふきよせどう　吹寄籐の弓持つて（最明寺殿）

〔吹寄籐〕籐を二所づつ押寄せて卷いた弓であるといふ。貞丈雜記・卷十、弓矢之部に、「曾我物語に云く、鹿こそ三かしら出できたりけれ、これいかにと見る所にかの祐經こそおつすかひておとしけれ、その日の裝束はなやかなり、浮綠綾の直垂に大斑の行縢に切文の矢負ひ、吹寄籐の弓の眞中とり云云。重籐は籐をしげく卷く故の名なり、ふきよせ籐は籐を二所づつ押寄せ卷きたるなり」。

ふく　行に窶れし姿にて普供のさばを盤に捧げ（以呂波）

〔普供〕普供養の略。無邊の聖衆の供養。肝要鈔・中に、「普供總供也、……普供二養法界道場一切海會聖衆二」。

ふくうけんじやく　ふくうけんじやく・千手千眼願くは千の眼を顯はし（嵯峨天皇）

不空羂索觀音をいひ、七觀音の一である。三面八臂で手に羂索・錫杖・蓮華を持つてゐられ、心念不空の羂索を以て、衆生を菩提の彼岸に濟度されるのである。

ふくぼんしゆ　ちんだ・泡盛・覆盆酒（天神記）

〔覆盆酒〕覆盆子を加へて製した藥酒。和漢三才圖會卷百五、造釀類、藥酒の條に、「楊梅酒・鷄卵酒・覆盆子酒等不二枚擧一、用二藥物及沙糖一、漬二燒酎或醇酒一、封二甕口一、候二其熟時一用」。

***ふくらすずめ**　ふくら雀は竹にもまろる（兼好法師物見車）　ふくら雀の羽を悩み、雪に折伏す篠竹の、徒に一夜の假の宿（烏帽子折）

〔脹雀〕雀の子をいふ。雀の子は親雀よりも羽毛がふはふはして脹らかに見えるからである。兼好法師物見車のここの文に就ては「ほふりんさがのおてら云云」を見よ。

ふくりやう　旦那ふくりやういたされ、せんぎまちまち麥門冬（薩摩歌）

〔茯苓〕松の根に寄生する塊根狀の菌核であつて、藥用となる。ここの文は「茯苓」に「ふくりふ」（腹立）をきかせたのである。立腹を腹立というた例は、西鶴諸國咄（大下馬）卷一、奈良の寺中にありし事の條にも、「腹立して使者の坊主を打擲して歸しける」と見えてゐる。

〔茯苓〕

***ふくりん**　白覆輪や金覆輪、今は梨子地の鞍鐙（雪女）

〔覆輪〕馬鞍の前後の輪の山形の上（卽ち緣邊）に銀の覆輪をかけたものを白覆輪といひ、金の覆輪をかけたものを金覆輪といふ。元祿時代は梨子地塗のが流行した。

***ふくろご**　逆子・袋子・德利子（孕常盤）　鷹が胤・あさましき袋子（浦島）

〔袋子〕胎兒の卵膜に包まれたまま胎盤と共に産まれたもの。

***ふくろざや**　萠黄羅紗の袋鞘……袋鞘は肥前佐賀の御居城（薩摩歌）　安藝の廣島（薩摩歌）

〔袋鞘〕鎗標。萠黄羅紗なるは佐賀城主鍋島信濃守綱茂の鎗標。

〔ふくろざや（綱茂）〕

廣島城主淺野安藝守綱長の鎗標。

***ふけう**　口惜しや敵を討つて父上へ孝行なせば母のふけう、出家を

遂げて母の心をなだめんとすれば（加増曾我）

〔不孝〕君父母の勘氣を被ることをいうたのである。「けう」は孝で、孝養を「けうやう」ともよんである。保元物語、新院御所門門かため軍評定の條に、「（爲朝を）身に添へて都に置きなば惡かりなむとて、父ふけうして十三の歳より鎭西の方へ追下すに」、とある「ふけう」も「不孝」である。

***ふげん**　櫻結びの花かつら、繫ぎ留めん普賢象、普賢は流れの身を守り（賀古敎信）　八字文殊・普賢延命（嵯峨天皇）　觀音・勢至・普賢菩薩（卯月紅葉）　普賢力をこらし引上げ再興あれと宣へば（用明天皇）

〔普賢〕普賢菩薩をいふ。法體遍滿なるによつて普といひ、最勝妙善なるによつて賢というたのである。この菩薩は三十三身に化現して護法說敎されるのであるが、普通の姿は蓮臺上に坐禪して左手に蓮花の莖を持ち、或は白象の上に坐して經卷を開き持つてゐられる。「普賢延命」は、禁祕抄階梯に、「或抄師云、普賢菩薩說二延命眞言一、故名二普賢延命一」と見えてゐる。普賢菩薩を本尊として延命の祈禱をなす修法を普賢延命法といふ。「普賢は流れの身を守り」は、謠曲・江口に、普賢菩薩が江口の遊女に化現して西行法師と歌詠み交したことが見えてゐる（この話、古くは古今著聞集に載つてゐる）。さればこれらのことから普賢は流れの身を守ると云うたのである。「流れの身」とは遊女のこと。「普賢力」は、なほ金剛力・觀音力などと云ふ類で、人力の及ばない偉大の力をいふ。

ぶこう　ハテ物に慣れぬぶこうなり藤孝、只今の詞に賴人(たのみて)は知れたり（女夫池）　目利(めきき)の通り馬追ふことはぶこうなれど（孕常盤）

〔不巧〕巧者でないこと。

ふさぬ　伊東・河津・宇佐美三箇の所、これをふされて久須美の庄と申すなり（伊豆日記）

〔總〕總括する。和訓栞に、「ふさぬる。日本紀に摂をよめり、總攝の意なり、よて統ノ字をもよめり」。名義抄に「摠フサヌ」。用明紀に、「總二攝(ふさねはかり)萬機一」。

ふじ　足へさがればふじ三里、灸と鍼とに行方なく（振袖始）

〔風市〕灸穴の名、直立し手を垂下して外股に中指の屆く處である、增補下學集（寛文九年刊）支體門に「風市(ふじ)、灸穴」。和漢三才圖會・卷十一、經絡部、足の灸穴をいへる條に、「風市＝奇兪也、在二中瀆上一、令二人正立一兩手垂下、當二外股中指端屆處一、大骨外傍也」。當麻中將姬（淨瑠璃）第二に、「足を撫でさすり、ハアこりや三里の灸もなきさうな、ふじの灸は候か」。（「ふじ三里」の「さんり」はその條を見よ）。

ふししば　擔ひて通ふふし柴の、暫し休らひ立ち給ふ、御有樣こそ殊勝なれ（釋迦）

柴をいふ。「ふし」といふも柴のこと。伏柴など書けるは當字。箋注倭名類聚抄・卷五、調度部・漁釣具の條に、「柴訓二布之一、見二神代紀一」。和訓栞に、「ふししば。柴をふしともしばともよめり、よて合せいふ也」。

***ふじたらう**　飯綱の三郎・富士太郎（十二段）

〔富士太郎〕富士山に棲んでゐたといふ天狗の名。謠曲・鞍馬天狗に、「飯綱の三郎・富士太郎」。富士山第一合目に太郎坊といふ名のあるのも、富士太郎といふ天狗の名に據つたものである。

***ふしづけ**　いとし盛りを情なく松川の水底に伏漬に沈め給ふ（冷泉節）　淀川のはやはや鬼神の首を斬り、淀川の伏漬に沈むべし（嫗山姥）

「伏漬(ふしづけ)」または「臥漬」などと書いてあれども、柴漬の義である。柴を束ねて水中に漬け置くことをいふ、よつて以て人を柴漬のやうにする簀卷（「すまき」を見よ）の刑をいふ。箋注倭名類聚抄・卷五、調度部・漁釣具に、「槑訓二之布之都介一、新撰字鏡云、槮槑同、不志豆布之都介、按布之都介、柴漬之義、柴訓二布之一、見二神代紀一」。源氏冷泉節のこの文は、源賴朝の子千鶴を松川のとどきの淵に伏漬に沈めたと云ふのであるが、賴朝伊豆日記（巢林子作）にこの事を記した文中に、「武士前後に立寄りて竹の簀卷のとりどりに繩よ葛といふ處へ、痛はしや姬君は徒歩や跣足の風情にて人目もわかず賍付けて、若君に抱きつきわつと叫ばせ給ひける」と見えてゐる。この兩文を對照すれば、巢林子も伏漬は即ち簀卷であるとしてゐることが知れる。

***ぶしつけ**　心中などで死ぬるのはお主に對してぶしつけ（二枚繪）

〔不躾〕禮儀作法を缺げること。

ふしつむぎ　共に双の諸羽二重の、同じ枕にふしつむぎ（氷朔日）

〔節紬〕節絲で織つた紬。ここの文は「同じ枕に伏し」に「節紬」をいひかけたのである。

***ふじなはめ**　緋縅や𩯐は朽ちぬ黄金され、名を卯花(うのはな)にふじなはめ白絲縅（用明天皇）

〔伏繩目〕節繩目とも書く。「ふしなはめ」といふを「ふじなはめ」と濁つたのである。白と淺葱(あさぎ)と紺との筋をつづら折に染めた革を細く裁てば、幕の手繩のやうに見えるによつていふ。伏繩目の革絲で縅した鎧を伏繩目の鎧といふ。

ふしはかせ　牛若君と我身の上、人知れぬ忍寢を十二段の物語に作り、みづからこれにふしはかせを附け（源義經）

〔節墨譜〕謠物の文の傍に節の高低長短などを示す墨譜。樂家錄・五十、雜箱に、「凡號レ節者唱聲必有二高下一、準二之竹節一故記二節字一也、號二墨譜一者以レ墨圖二高下一、而能計二合之一、故記二墨譜一也、譜即記矣」と見えてゐる。蓋しここに云へる如く「ふし」は節であるが、「はかせ」は拍子の轉語であらう。

ふしやう　從六位の府生を給はりける（融大臣）

〔府生〕近衞府、衞門府、兵衞府、檢非違使廳のいづれにも府生があつて、下官である。

***ふしやう**　與兵衞うろたへ逃損ひ、押割る供先伯父の目にかかる不祥の出合がしら引捉へ捻据ゑ（女殺）　片荷づつて力に足らぬ、相手のふしやう常夏と片手に取つて引寄せ（會稽山）　むざと男の來ぬ所へ來たがふしやう、明日まで待ちや（薩摩歌）　武家に生れたふしやうには大門口で立腹切り（反魂香）　九兵衞ふしやうな調子にて、エエ粗相なお梅様、文を封じちがへて、久米様へのぬれ文が法印様のお手に入る（萬年草）　これは近頃ふしやうなる所へ參りかかりて候ものかな（百日曾我）

〔不祥〕不仕合。不運。因果。祥は「さいはひ」の義。（古刊院本にはこの語に「ふせう」「不肖」と書いたのがある）

ふじやう　「ふぢやう」を見よ。

ふしよ　貧僧の力に及ばす、願ふらくは多少を論ぜずふしよの思をはげまし給へ(用明天皇)

〔補處〕前佛既に滅して後佛其處を補ふ義。轉じて佛弟子をいふ。觀音玄義・中に、「補處者、前佛既滅、而此菩薩卽補二其處一、故云二補處一」。

***ふしよう**　人を勸めの歌念佛、修行の僧に身を俏しふしようを肩に打懸けて、しんくの紐のかれてより知らぬ拍子はうつつなや(井筒)

〔鳧鐘〕鉦鼓を云ひ、形圓くして皿に似る。懸けて撞木をもて打鳴す。謠曲・隅田川に、「鉦鼓を母に参らすれば、我子の爲と聞けばげに、此身も鳧鐘を取上げて」と見えてゐる、鳧鐘は卽ち鉦鼓である。和漢朗詠集に、「鳧鐘夜鳴、響徹二暗天之聽一」とある、鳧鐘は鐘である。諺言故事・卷二に、「鑄レ鐘匠曰二鳧氏一、周禮考工記・鳧氏爲レ鐘」と見えてゐる。鳧氏が鐘を作つたが故に鳧鐘といふのである。

ふじんじやう
「晉の朱序が母云云」を見よ。

***ぶしんぢゆう**　不心中か心中か、誠の心は女房の、其一筆の奧深く(天網島)　小春殿に不心中芥子程もなけれども(天網島)　あの不心中者なんの死なう、灸をする藥飮んで命の養生するわいの(天網島)

〔不心中〕人に對して義理を守らず眞實を缺いで薄情。巢林子のこのあたりの文は、小春が治兵衛の妻おさんに、「身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合ひ思ひ切る」と書いて與へた手紙の義理を守り、獨り死ねば萬事濟むと決心せる、そのむごらしい心を治兵衛知る由もなく、小春を不心中者と思ひ込む。おさんは小春の眞實の心を知つて、その死を救はうとするせつなさに、遂に小春と取替はした秘密の手紙の大事を治兵衛に打明けるに至つて、忽ちに離別・情死の悲劇の大團圓を誘致することとなる。

ぶす　愚僧は若い時から犬はぶすでをりやるよ(天鼓)

〔附子〕毒藥の名なるが轉じて、惡み嫌ふものをいふ。下學集に、「附子。毒藥」。和訓栞に、「ぶす。貝原氏の說に蝦夷の人は附子を矢じりに塗て獸を射る、これをぶすといふ、是草烏頭を煎じたる時射罔なるべしといへり、さればぶすは附子の音便なり、世の人好まぬことをぶすといふもこれなるべし、賊盜律以二毒藥一藥レ人の内にも入たり、射罔は本草に見えたり」。釧路地方の言葉に、「シヤモ(和人の義)が來たらブシ矢(毒矢)で殺せ」といふがある。「ブシ」はもとアイヌ語か。狂言に「附子」といふもある。

***ふすべる**　立つてはふすべ居ては譏り(卯月潤色)

〔燻〕火の爵して燃えぬをいふ。轉じて、憤を含んで嫌(いや)みをいふこと。喧嘩がましいことばかり言うて、家内の者にいつも不愉快な感じをさすをいふ。

ふす山何　花の下の連歌師や、神祇釋教戀無常、ふす山何かの御挨拶(三國志)

〔賦山何〕連歌の賦物五ケの内である、連歌辨義卷三に「連歌の賦はくばるといふ意なり、百韻五十韻句每に其物を山何、何路、物くばる故なり云云」、と見えてゐる。連句の中に名物・物語の名・景物の名・調度の名などを讀込むことを賦物といひ、和歌の物名から轉用されたもので、これに上賦と下賦とあつて、上賦の題は賦山何、下賦の題は賦山何などと記して賦物を定め、何の字に代るべき山と連續した語を句中に讀み込むのである。この法はもとは連句に用ひた言語上の遊戯であつたが、後には發句にのみ試みられるやうになつた。

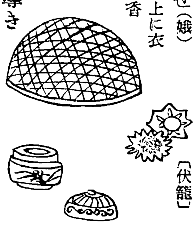
***ふせ**　さらばお布施を包まうと(薩摩歌)

〔布施〕梵語・檀那(Dāna)の譯語、布は普、施は捨の義。一切衆生を愛愍するが故に、一切の物を惜まず惠施すること。轉じて僧尼などに與へる財物をいふ。大乘義章・十一に、「言二布施一者、以二己財事一分二布與他一、名レ之爲レ布、惙レ己惠レ人目レ之爲レ施」。

ふせご　まづ横笛は暫しこれに隱れよとふせごに

〔伏籠〕伏せて上に衣を被ひ、内に香爐を置き、香を焚いて匂を衣に移す籠。

深く忍ばせ(娥)



〔伏籠〕
(女用訓蒙圖彙所載)

***ふせや**　迎へ給へや導き給へと、唱ふる聲は伏屋に殘つて、形は見えず消えにけり(反魂香)

〔伏屋〕萬葉集に「廬屋」を「ふせや」とよんである。地に伏してゐるやうな賤屋。

ぶぜんばう　筑紫には彥山ぶぜん坊(三國志)　筑紫に於ては彥山豐前坊(十二段)

〔豐前坊〕豐前の彥山に栖んでゐたと云ふ天狗の名。謠曲・鞍馬天狗に、「筑紫には彥山の豐前坊」。

ふせんりよう　浮線綾に紅梅裏の袋を開き(丹波與作)

〔浮線綾〕綾の浮織。貞丈雜記・卷五、裝束之部に、「浮線綾と云ふは綾の名也、線を浮むる綾とよみて、織紋の線を浮べて織りたる綾也、卽ち浮織の綾の總名也」。

ぶた　粗相して後悔すな、手つけぶたぢやといひければ(大職冠)　さるにも此儘にぶたで果てなん無念さよと淚ぐみ立ちしが(大職冠)

かるた札の勝負に、數をいふ一種にこの名のものがある由、獨癡に見えてゐる。「さるにても此儘に云云」は、謠曲・海士に、「さるにても此儘に別れ果てなん悲しさよと淚ぐみて立ちしが」とあるのもぢり。

***ふたい**　六根の罪障消滅し、不退の彼岸に到れよ(會稽山)　佛法不退のお山となる(西王母)　我成道して主從の緣盡きず、不退の友となるべきぞ(釋迦)　淸風に乘じて不退地の雲に遊ぶ(百日曾我)　末世末代不退轉の御回向賴み存じ候(萬年草)　末の世までも不退轉、寂光淨土の臺とかや(吉野忠信)

〔不退〕不退轉の略。佛道修行の過程に於て得た功德を退失せぬこと。無量壽經に、「皆悉到二彼國一、自致二不退轉一」。「不退地」は阿彌陀佛の極樂淨土をいふ。蓋しこの地に生じる者は再び迷界に退轉することなきが故にこの名がある。「不退の友」は、互に善業を修して親交の退失することなき友。

ぶたう　「ぶとう」を見よ。

ふだうげ　これぞほんの丹波越と、不道化言うて忍び出る(淀鯉)　葬禮の戾りに祝言の家へ立寄るは、なめ過ぎたふだうげ可笑しうない歸れ歸れ(反魂香)

〔不道化〕戲諧をいふ場合でない時にいふおど

け。「だうげ」は「おどけ」の轉換語の訛であつて、「からだ」(身體)を「かだら」、「ちやがま」(茶釜)を「ちやまが」、「えんぎ」(緣起)を「ぎえん」といふの類であらう。

ふたくすじ 一枚ひねつて額に當て彼のばくていに飛入れば、そろを脇から二くすじの三馬あざがけ湊ぎつつ(大織冠)

博奕の語、二枚の札をごまかして盜取ること。

ふたくちや 二口屋のはみ出し、猪熊の革柄、なぜに遲いと毎日二三度使が走る(女腹切)

〔二口屋〕京都室町今出川角にあつた有名な饅頭屋で、二口屋能登といふ。雍州府志(貞享三年刊)土産門上、造釀部に、「饅頭。……松屋・龜屋・二口屋・寶來屋等互爭競造二饅頭一云々」。買物調方三合集覽(元祿五年成)京の菓子所の條に、「室町今出川角、二口屋能登」。長町女腹切のこの文は、二口屋のはみ出し饅頭に、はみ出し(その條を見よ)をいひかけたのである。

***ぶだしよ** 札所札所の靈地靈佛(曾根崎)

〔札所〕巡禮者が參詣して札をうつ三十三所の觀音堂。「おほさかさんじふさんしよ」を見よ。

ふたせ エイしやらくさい、二瀬仲居も小差出、飯炊は來て火吹竹(重井筒)

〔二瀬〕下女を勤め、また客にも接する賣春婦の一種である。二瀬といふは勝手向と夜の伽と二瀬にわたつて勤めるからの名である。井原西鶴撰・好色一代女・卷六、旅泊人詐の條に、「食燒下女が見るを見まねに色つくりて、大客の折ふしは次の間に行て御機嫌をとる、是を二瀬とはいふなり」。西澤與志撰・茶傾腹立顏(寶永五年刊)卷三に、「茶屋白といふて二瀬あり、内を勤時は小らん・小吉と呼ばれ、白にまはす時はきぬえ・たが野・しめなどと替へ、身一つにて内外の勤、雨降りに傘、日和に草履貸る (野白內證鏡(寶永七年刊)所載)に等し」。世間娘氣質・五之卷に、「女ながら針持つすべさへ知らず、氣をつめてちちめなる奉公はとてもせぬ心なれば、上間屋下問屋へ蓮葉女といふいたづら奉公勤め、諸國の商人の夜のなぐさみものになつて、果は新地堀江の二瀬に流れ渡り……」。

〔ふたせ〕

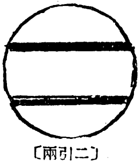
(百人女郎品定所載)

〔二瀬〕

二つ道具 御家中の物頭采配までゆるされ、二つ道具をつかせし身が、心まで上上の馬方になつたよな(丹波與作)

外出の時に儀衞に立てて行く二本の鎗。

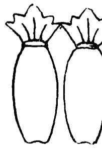
***ふたつひきりやう** (女夫池)(川中島)(女楠)


〔二引兩〕

〔二引兩〕足利氏の紋所で、引兩とも二つ引ともいふ。

ふたつへいじ 二つ瓶子はかはごえ(五人兄弟)

〔二瓶子〕紋所の名。


〔二瓶子〕

ぶたふてんじん 素盞嗚の大蛇を斬つて、唐國に武塔天神と名乘り(國性爺後日)

〔武塔天神〕素盞嗚尊の稱。倭漢三才圖會卷七十二、山城國祇園社の祭神を記せる條に、「牛頭天王素盞嗚尊或云武塔天神」。雍州府志卷二、神社門上、愛宕郡、祇園社の條に、「所謂三座、第一牛頭天王或謂二感神大王一、又稱二武塔神一、是則素盞烏尊也、云云」。

ふたまただいこん お寺の大黑と書は隱して長持に入れて二股大根や、夜は抱かれてね祭の(松風)今日は五日宵庚申、甲子が近い二股大根のけておけ(宵庚申)

〔二股大根〕二股になれる大根を俗に福來といひ、福の來るを祈つて、甲子の日の夜に大黑天を祭り、大豆及二股大根を供へる。日次紀事(延寶年中成)十一月の條に、「銀座大黑屋尊二崇子祭一特祝レ之、……凡諸商此月子時祭レ之、蓋買賣之間取二其利一也、欲レ比二鼠子之蕃息一也、凡所レ供レ子之膳食每品加二大豆一、又供二兩股大根一、大豆鼠之所二好食一也、兩股大根俗稱二福來一」。松風村雨束帶鑑のここの文は、長持に入れて蓋を二股大根にいひかけたのである。

ふちがしら 御池の町のふち頭、小川通のせかいらぎ今日明日に持たしてやれ(女腹切) 三年の切米にも叶はぬ大小の鍔ふち頭(蛙合戰)

〔緣頭〕頭は緣の中に嵌り一具の物であつて、刀の柄のさきに附ける金具で、柄頭または冑金といふものである。稻葉通龍撰・裝劍奇賞・卷一に、「緣頭と並稱すること未だ所見なし、但頭といへるもの日本紀に劍柄また劍頭と書きてたかみとよみたるあり、是延喜式に柄頭と云ふものならん、中頃には冑金など云へるよし或說に見えたり」。

ぶちくふ 何でも今夜はあんばいよしでもぶち食つて、小牛切のけんどん酒(吉岡染)

〔打食〕「食ふ」を「ぶち食ふ」と强げにいふ奴詞で、「打ち任す」を「ぶち任す」といふの類である。

藤田小平次 この新七めが親は大和の貧乏人、幼少の時藤田小平次と申した狂言役者へ奉公やら養子やらに參つて、女方を致したを(淀鯉)

元祿頃上方にゐた實事立役に堪能の名優である。棠大門屋舖(寶永二年刊)に、「六方は嵐、實事は藤田小平次と、此二役は何れの役者が勤るもこれをぢばんにすといへり、響なる哉小平次、一生顏を紅粉にぬらず裸にならず、不斷撫付かつらに上下か羽織はづさず、年中姿をかへず、實事をして見物にいやといはれず、思へば思へば上手也」。

ふぢなはめ 「ふじなはめ」を見よ。

***ふぢなみ** 松に懸れる藤波の、空紫の色色も、花一時の世のならひ(持統天皇)

〔藤浪〕藤靡の義。藤の花房。和訓栞に、「ふぢなみ。藤並藤波など萬葉集に書り、されど藤靡の義、しなひなびくをいふ」。

藤の木柱 藤の木柱・茅屋の雨、人こ

そ知られ屋の内に、直で立つたる人はなし(卯月潤色)

藤の莖柱は曲りくねる。巢林子のこの文は、藤の莖柱のやうに家内の者は皆邪曲で、「直で立つたる人はなし」と受け、茅屋に降る雨は音せねば、「人こそ知らね」と受けていうたのである。

ふぢのまるのかうやく　血汐變じて濃紫、藤の丸の膏藥にて養生加へて沁りける(扇八景)

〔藤之丸膏藥〕駿河國庵原郡清見寺の傍なる藤之丸屋といふ藥舗で賣つてゐた膏藥である。西鶴撰・武道傳來記(貞享四年刊)巻之四に、「それより世上を知るためとて清見寺の膏藥に遣し、藤の丸屋の見世に置きしに美少なれば旅人の目に立ち」。(但しこの膏藥は京大阪江戸でも賣つてゐた。西鶴撰・胸算用(元祿五年刊)巻二、銀一匁の講中の條に、「諸道具今宮から長町の藤の丸の膏藥屋の門まで續きし」。明和新增京羽二重大全・巻三に、「藤丸膏藥。烏丸通綾小路下八町藤屋權兵衞」。諢話浮世風呂・三編巻之下に、「けふは日本橋から膏藥を買つて來てもらつた、……藤の丸は舊家なり、慶長年中湯島天神の門前に於て創業し、萬治二年日本橋通二町目に開店してより年歐凡百五十餘年連綿と相續す云云」)。丹波與作・道中雙六の條に、「膏藥買うて月を吸ひ出せ清見寺」とある膏藥も、名物清見寺藤之丸膏藥をいうたものである。「きよみでら」をも見よ。

ふぢばかま　(用明天皇)

〔藤袴〕菊科に屬し、秋の七草の一、莖圓く葉は節に對生して形長く鋸齒あり、夏秋の頃淡紫色の小形

〔藤袴〕

花枝端に簇生す。

ふちや　鎌田はそれともしら眞弓、ふちや射るとは酒故に氣の付かぬこそ哀なれ(鎌田)

〔扶持矢〕助けの矢。扶持はたすけもつ義。禮記に「出入則或先或後、而敬扶二持之一」。孟子に「疾病相扶持」。ここの文は鎌田はそれとも知らずを白眞弓にいひかけ、白眞弓の縁で扶持矢射るといひ、扶持矢射るとは助けの矢を放つということであつて、即ち鎌田の氣付かぬのを氣付いて、用心さすやうに助言する意にいうたのである。

***ふぢやう**　お前の心が不定で外を家になさるる故(生玉)伏見屋の太兵衞殿心ふぢやうに身體を持崩し・イみもない樣になり果て(宵庚申)

〔不定〕定まらぬこと。たしかならぬこと。うはき(浮氣)。心中宵庚申の古版本(七行四十七丁本)のここの文に、「太兵衞殿心ふじやうに」とあれども、正しくは「ふぢやうに」と書くべきで、當時は假名遣をやかましう言はれなかつたことは申すまでもない。現にここに擧げた生玉心中の文も、正本(七行四十七丁の古刊本)には、「おまへの心が不定で」とあつて、「不定」に「ふじやう」と振假名が附けてある。近松作・本朝三國志第二に「曾呂利が名歌今に限らず、ふじやうを拂ふ妙文たり」、とある「ふじやう」も「ふぢやう」(不定)であつて、不定業即ち前世から定まつてゐる業報でないことの意。

ふ・ちゆう・ちん　さすがの法眼手も顫ひ、浮中沈の三候も、心肝腎も命門も、右にあるやら左やら(冷泉節)

〔浮・中・沈〕漢方醫が人の脈膊を取るにいふ術語、手に關・寸・尺と稱する所があつて、この三部の脈膊の取り方に浮といひ、中といひ、沈といふ取り方がある。「浮中沈の三候」とは、脈膊を浮・中・沈の三種の取り方によつて、病症を候ふ(診察)ことをいふ。明吳崑撰の脈語・巻上、取脈入式の條に、「醫家取レ脈常以二平旦之際一、取二手太陰肺經一、掌後高骨名曰レ關、關之前名曰レ寸、關之後名曰レ尺、浮以取レ表、沈以取レ裏、中以取二胃氣一、寸部法レ天、候二胸以上至一レ頭之有レ疾也、關部法レ人、候二膈以下至一レ臍之有レ疾也、尺部法レ地、候二臍以下至一レ足之有レ疾也、左脈候レ左、右脈候レ右、兩手皆然、病者危迫則勿下以二平旦一爲上レ拘、雖二一日三一診レ之」と見え、寸關尺義の條に、「從二魚際一至二高骨一、却行一寸、因名曰レ寸、去二尺澤一一尺、因名曰レ尺、界二乎尺寸之中一、因名曰レ關」と見えてゐる。和漢三才圖會に、手太陰肺經は肺の筋、魚際は「在二手大指本節後內側陷中一、腧横紋略上、散脈之中、白肉際魚腹之坳」、尺澤は「在二肘中約文上、屈レ肘横文筋骨罅中動脈一」と見えてゐる。

ふつきさう　(松風)

〔富貴草〕牡丹の異稱。周茂叔の愛蓮說に、「牡丹華之富貴者也」。

ふづくる　阿房三太ならむうげんだで、やまけふづくろ內儀の心(丹波與作)

謀をもつて人をたぶらかす。たらしすかす。蓋し文作で、色艷をつけて構成する義であらう。女大名丹前能(元祿十五年刊)巻四、思ひの山當世班女の條に「長長しき舟、物言はではすまぬ事、何とぞふづくり我我ばかりくだらん分別あるまいか」。商人軍配團(江島其磧撰)二之巻、商人の刄物目利は大疵の其の條に、研屋から刀二十七腰を銀八貫五百目で求め、本阿彌をして鑑定せしめたれば、三百目の價ほかないというたので、「これはふづくられしと大きに心散亂し」とある。色道大鏡・態藝門に、「當道のふづくるは謀をもて人をたぶらかす事をいふ、究竟是は偶人より出たる詞なり」。和訓栞に「ふづくる＝俗語なり、人をふづくるなどいふはたらしすかす意にいふめり」。

ぶつげんしんごん　心月輪の祕印を結び佛眼眞言を唱へ給ふ(嵯峨天皇)

〔佛眼眞言〕佛眼尊(一切佛眼大金剛吉祥一切佛母心尊の略)の陀羅尼をいひ、瑜祇經金剛吉祥大成就品に見え、この本尊特有の咒文で、「南謨三曼陀勃馱南唵勃馱嚕遮尼娑訶」といふ。

佛生同體の人間　況んや佛性同體の人間子と生れ親となる(兼好)

佛性は佛陀たるべき素性の意で、各人の具有する眞如法性をいふ。涅槃經に一切衆生は悉く佛性を具有すと說いてある。よつて佛性同體の人間というたのである。「地を走る獸云云」をも見よ。

***佛神三寶**　佛神三寶も見捨てさせはし給はじ(大原問答)佛神三寶番屋冥利何事も隱さず勿論他言致すまい(扇八景)

佛・神と佛・法・僧(三寶を見よ)。また佛神三寶も照覽あるの意で自誓の詞に用ゐる。

佛神水波　ここも稻荷の神社、佛神すゐはのしるしとて(曾根崎)

佛は神の本地にて、神は佛の垂跡なれば、神と佛とは恰も水と波とのやうなものといふ本地垂跡說に據つたのである。謠曲・誓願寺に、「神といひ佛といひ、唯これ水波の隔てなり」。

***ぶつちやうがほ**　藪からぼう主の佛頂顏(女腹切)天窓かく介ぶつちやうづら(夕霧)

〔佛頂顏〕佛頂面ともいふ。脹れ顏。むつとし

た不快な顔付。蓋し佛頂尊の恐しい顔付に喩へた語である。

ぶつつく 茶屋へ來て産所の夜伽する事は、竟に無いづとぶつつけば(天網島)

ぶつぶつと不平をいふ。ぶつくさする。「ぶつつく」の「つく」は、「どくつく」(毒突)などいふ「つく」と同じ語。(この語今も福山市あたりで往々用ひてゐる)。

ふでがき 色づく木練・君遷子、その品品は筆柿も書き盡されずと賣りにけり(嵯峨天皇)

〔筆柿〕柿の一種。雍州府志・六、土産門上に、「筆柿。柿頭尖立而似㆓筆尖㆒故稱㆑之、熟則其色紅而味甘、洛北村婦盛㆓是於平盆㆒戴㆓頭上㆒賣㆓市中㆒云云」。

筆捨枝 慮外千萬千貫枝筆捨枝や(反魂香)

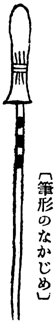
紀伊國藤代に筆捨松といふ名木あるによつて、松枝の姿勢佳きをかくいうたのである。

筆捨松 (反魂香)

地名部「ふぢしろ」を見よ。

筆形の中締 栗色のたたき鞘・筆形の中締は江州彦根の御大將(薩摩歌)

鎗標(彦根城主、井伊掃部頭直通の鎗標)。



〔筆形のなかじめ〕

***ふどう** 不動の刄に喉笛を突通されに(氷朔日) 不動明王の縛の繩手綱に變じ給へやと(會稽山) 不動の慈救の偈・明王の火焔の黑煙立ててぞ祈りける(用明天皇) 不動の眞言どたくたぐわつたりばつたりだ(女殺) 江戸爲替慥に請取りました、不動參りに待ちまする(冥途飛脚)

〔不動〕不動明王をいふ、詳しくは大聖不動明王といひ、五大明王の一で中央尊となつてゐられる。大日如來の化身で、忿怒破邪の形相を火焔中に現じ、右手に利劍を持ち、左手に羂索を執つて、磐石上に坐してゐられる。「不動の慈救の偈」は「じく」を見よ。女殺油地獄のこの文は、法印が與兵衞に引ずり下され、また踊上つて不動の眞言を唱へるやら、法印と與兵衞といがみ合うてどさくさばたばたするの意である。不動明王の眞言の「曩莫三曼多(歸命普遍)縛日羅赦(諸金剛)」と、「どたくたぐわつたりばつたり」とが結合してゐるやうである。「不動參り」は大阪北野稻荷山の南なる不動寺に參詣すること。

ぶとう 練物屋の灰毛猫は、憎らしいぶとうな形で遠慮會釋もなう(大經師)

「ぶたう」(不當)である。形姿の當を得ないこと。不樣。風流曲三味線(寶永七年刊)一之卷、色より思ひを懸け拳る曼陀羅の條に、「佛壇の下より蒲鉾・車蝦のぶとうに切りし肴を出し」。(序云、源氏物語・浮舟の卷に、「この大將殿の御さうの人人といふものは、いみじきぶたうのものどもにて、一類この里にみちて侍るなり」とあつて、本居宣長の說に、「ぶたうを不道・無道などいふ說いかが、もしは武道にもあらんか」とあるが、この語とは別)。

ふどうくにゆき 武智が眞甲梨割に切れも切れたり不動國行、げに道理とはこれなりけり(三國志)

〔不動國行〕來國行作の刀をいふ、京物で其品稀であつて、刀の列位高きものである。

ふとか男 肝のたばれへ諸白いつかけた薩摩二才、ふとか男であつたばん(博多)

太かる男の義。肥大な男。この語現今も長崎・鹿兒島地方で用ひてゐる。

ふとのおよね 庄野のふとのおよれが俵腰に喰ひ付いて(丹波與作)

〔太阿米〕肥滿のお米(女の名)。「ふとのお米の俵腰」といへるは、庄野の名物燒米俵の緣によつたのである。東海道名所記に「この宿(庄野)の名物は俵の燒米なり、その俵のなりは大さ握拳ほどなり、靑き緒にて强くしめたるは倫子の形に似たり、内に燒米少しあり、家毎に並べおきて賣りけり」。「しやうの」をも見よ。

ふとのつと 大江の僧正太祝詞奉り(最明寺殿)

〔太祝詞〕祝詞の美稱。「太」は誠の義。「のつと」は「のりとごと」(宣說言)の略なる「のりと」の約つた語。神に告り申す詞。

ふとまがりのせんべい 砂糖羊羹臚腸羹伏兎曲の煎餠饅頭(天神記)

〔伏兎曲煎餠〕餢飳糫餠とも書いてある。粳粉麥粉に砂糖を加へて油であげた煎餠である。

ふなこじり 木瓜鍔の太刀作、九州やうの大反、烏帽子たたきの船鐺(百合若)

〔船鐺〕船底形に反つた刀の鞘の末端の飾の金具。「烏帽子たたきの船鐺」とは、烏帽子形に打つた船鐺の意。

***船靈神** 總じてこの住吉と申すは船路を護りの御神にて、……船靈神とも申すなり(國性爺)

船玉神とも書き、海路の平安を祈る神。主として住吉明神をいふ。和訓栞に、「ふなたま 船靈の義、續日本紀に見えたり、住吉神の和魂を祭る、延喜式に見えたり」。

***ふなばり** 其時鬼王船張に跪き(小栗判官) 氣がくたびれてとろとろと船ばりに手枕して(薩摩歌)

〔船張〕船梁とも書く。船の右舷から左舷に亘せる梁木。和漢船用集に、「船張。船の橫樣にわたしたる木なり、川船の小舟にてはこの木に居て櫂をあつかふ故に舟張のゐかいと云ふ、海船にては上に現はれたるを櫓床といひ、下にあつて隱れたる橫木を舟張といふ」。

ぶば 舞馬鬪鷄に國を失ひし亂國の端不吉とや申さん(千疋犬)

〔舞馬〕舞樂の名。馬上に綵衣を着て舞ふもの。樂府雜錄に、「馬舞、櫳者馬人、著㆓綵衣㆒執㆓鞭子牀上㆒、舞蹀躞蹄、皆應㆓節奏㆒也」。

***ふびん** 不便になさるる四郎二郎まで命を助かることなれば(反魂香)

〔不便〕不憫と書くは當字である。憐むべきこと。可愛想なこと。不便は荀子議兵篇に、「汝所㆑謂便者、不便之便也」と見えてゐる。「便」は「べん」であるが我國では古くより「びん」と音讀し、不便は便利でない義から轉じてたよりないことに云ひ、更に「かはゆさう」「憐れな」の意にいふ。

ぶぶ 母樣ぶぶが飲みたい(女殺油地獄)

湯又は茶をいふ小兒語。湯又は茶は熱いので、ぶうと吹き冷すから「ぶう」といひ、「ぶう」の頭の一音を躍らせて「ぶぶ」というたのである。また轉じて水をもいふ。小兒語には一音を躍らせていふのが多い、「とど」の條を見よ。

***ふぼん** 一生不犯の願を立て(蟬丸) 某も今日までふぼんたり(酒呑童子枕言葉)

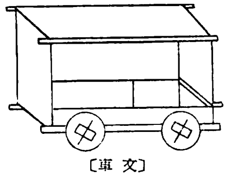
〔不犯〕女子を犯さぬ義。女に肌をふれぬこと。

ふみいか 誰が文凧の一結び(氷朔日)

〔文凧〕結び文の形に作つた紙鳶。

ふみぐるま 萬巻の文車牛に汗して轟かし(用明天皇)

〔文車〕「ふぐるま」ともいひ、書籍を積む車。徒然草・第七十二段に、「文車の文」とありて壽命院抄の註に、「ふぐるまは今禁中に有、又東寺にもあり、失火などの時早く引出さんための用なり」と見え、大全には左の圖が載せてある。



〔文車〕

ふみこくら 腕や臑の力は御侍にも負け申さぬ、はりこくら蹈みこくらは此膝骨の碎くるまでと(百日曾我)

「ふみことくらべ」(蹈事競)の略。蹈み競べ。

***ふみつき** 頃は文月半の空(女護島)

〔文月〕陰曆七月の稱。蓋し稻穗の見える月即ち穗見月の義であらう。

***ふもんぼん** 大慈大悲の普門品、妙法蓮華きやう橋を越ゆれば(天網島)

普門品は妙法蓮華經の中にあつて觀音經ともいふ。「普門」とは觀世音菩薩が普く人を佛道に導き入れ給ふ門戶をいひ、普門品はこの普門の法を明にしたものである。ここの文の「きやうばし」は、妙法蓮華經の「經」に京橋をいひかけたのである。

***ふゆとし** 冬とし一言のことわりもせず、今もまづ身に逢ひたいといふべい所、竹を呼出しくれとはのぶとい者だ(夕霧) 冬としも鶴が橋のおばばへ大きな鏡にめぐろ添へてすゑられた(夕霧)

〔冬年〕前年の暮。

***ふよう** 太刀を拔いて御覽あれば、明明として芙蓉の開くが如く(嫗山姥) 綠の眉・芙蓉の目元わさわさと(卯月潤色) 芙蓉の顏・柳の眉(弘徽殿)

〔芙蓉〕蓮花をいふ。文海披沙に、「芙蓉は蓮花なり、一名は荷、一名は芙蕖、一名は菡萏、根を藕となし、莖を茄となし云云」。芙蓉の目元、芙蓉の顏などといふは、美人の顏容を形容していふ。李白詩に、「美人出二南國一、灼灼芙蓉姿」。白居易の長恨歌に、「芙蓉如レ面柳如レ眉」。

ふらすこ 瑠璃白玉のふらすこにちんだ泡盛(酒呑童子)

葡萄牙語 Frasco. 硝子製の德利。

***ふり** 二月中旬にふりを獻ずる榮華なり(國性爺合戰) 人の面消え消えとふり茄子の形を現じ(弘徽殿鵜羽産家)

「うり」(瓜)をいふ。枕草紙・うつくしきものの條に、「ふりに書きたるちごの顏」。易林本・節用集、幾部・草木に、「胡瓜」。「二月中旬云云」をも見よ。

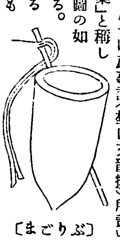
***ふり** 上着をぬげば右左、ふりとつめとのかたちぐに(歌念佛) 茶屋で此方のまゐる茶は新造のふりかつめ茶か(卯月潤色)

〔振〕振袖の略。夫を持たぬ娘分の間は振袖を著る。「振か詰」とは、振袖を着る若い娘か、詰袖を着る年增女かの意。

ぶりごま 心すわらずぶりしやりのいぶりぶり獨樂(松風)

往時長崎で「ぶり獨樂」と稱したものは左圖の如き獨樂である。ここにいへる「ぶりごま」も同種類のものであらう。

〔長崎歲事記(埜口文龍撰)所載〕



〔ぶりごま〕

***ふりづんばい** そのいましめにあひながら、菜を摑まんとは腕なしのふりづんばい、かたはら痛し事をかし(出世景清) 石塔に耳なく卒塔婆物言はねばとて、拔かぬ太刀の高名腕なしのふりづんばい、草の蔭にてさこそ可笑しく思されん(烏帽子折)

「ふりづんばい」は振飄石と書き、振飛礫をいふ。竿の端に繩を附け、これに礫を掛け、振廻して礫を遠方に飛ばすもの。「腕無しのふりづんばい」とは、腕力の無い者が振飛礫を競合ふやうに口先ばかり强いことを言ふのは何の役にも立たぬことの意、即ち力なくして擬勢張るの無益なるをいふ。風流曲三味線(寶永七年刊)一之卷、一盃食はして乞食にもらふ命の條に、「腕なしの振づんばいと無い袖がどう振られう」。俚言集覽に、「ツムはツムにて圓なり、バイは貝の名、圓貝を礫打に用ゐる故にツムバイといふ」。

ふりばり 死女郎のふりばりめ、竹の鞭を食ふなよ(丹波與作)

「ふんばり」ともいふ。その條を見よ。

ぶりぶり 戾すぞと投返せば、取つては投かけ投戾し、二三度四五度せり合ひしは幼遊のぶりぶりや、ぎつちやう手鞠つくばねの、峯に山彥のどうどうどう(隅田川)

〔振振〕往時京都地方で正月頃に流行した小兒遊技の一である。紐を振つて其はずみのつきたるを以て打つから「ぶりぶり」というたのである。ぶりぶりは毬杖とは別物であつたが、槌の代りにぶりぶりの紐を振廻して球を止める遊となつてからは毬杖と同じ遊戲となつた。「ぎつちやう」を見よ。

ふりやう 黃金の寶鐸、白金のふりやうの聲(聖德太子)

〔鳧鈴〕鳧鐘(その條を見よ)の形の鈴。

ふる 山手には二重三重の柵をふり、海手に數箇所の物見の番(最明寺殿)

〔振〕造る。烏翠堂北巠撰・北國巡杖記(文化三年の跋あり)に、「冢を築き石の柵をふり」。和訓栞、「ふる」の條に「柵をつくるをもふるといへり」。

古き都 古き都の所から、花散里の藁圍ひ(蟬丸)

大津をいひ、嘗て天智天皇の帝都であつた。天智天皇は御卽位の六年三月飛鳥岡本宮より近江國滋賀の大津宮に遷り給うたが、その崩御後壬申の亂があつて、天武天皇は飛鳥淨御原に都を奠められたによつて、大津の宮は荒都となつた。

***ふるな** たとひ相手が富樓那の生れ變りでも、ゆがんだ物はゆがんで映る(隅田川) 辯舌はふるな尊(大原問答) 如何なる富樓那の辯舌も何と言拔け遁れうぞ(女夫池)

〔富樓那〕本名を Purna-Maitrayaniputra と云ひ、釋尊十六弟子中の一人で、辯舌巧に說法の名人として衆弟子中第一の尊者であ

った。

*ふろ　南の風呂の浴衣より今この新地に戀衣(天網島)　夫にはあらぬ白の風、風呂の煙のたちゐまで(卯月紅葉)　白の白茶か風呂で焚いた煎じ茶か(卯月潤色)

〔風呂〕もと風爐の借字である。風爐は席上に置いて湯を沸かす爐である。轉じて浴槽をいふ。當時風呂屋には湯女(ゆな)と稱して、表面は浴客の髮を洗ひ又は垢搔をなし、內實は娼妓同樣の所業をなす賣春婦がゐた。故に風呂屋は遊女屋をも兼ねたやうなものであつた。嬉遊笑覽に「大阪の島の內の娼家は某風呂といふ、さくら風呂・ときは風呂といふ類なり」。近松のここに云へる風呂は渇女（「ろしう」ともいふ）のことをいうたものである。「ろしう」(呂州)をも見よ。

ふろふき　人參の風呂吹を一期の見はじめ(反魂香)

〔風呂吹〕大根を湯煮にし、其熱い間に味噌を塗つて食ふものをいひ、湯氣の中で吹くからの稱。但ここは人參を風呂吹にしたのである。

*ふろや　茶屋風呂屋へも身を賣つて(淀鯉)　かなはぬ心を碎かんより、同じか熊野(ゆや)より風呂屋にせよ(本領曾我)

〔風呂屋〕「ふろ」を見よ。

*ぶゑい　抑も斯波の武衞の館と申すは代代左右の兵衞に任ず(雪女)

〔武衞〕兵衞府の唐名。兵衞府は左右あつて、宜陽門・陰明門以外を警衞し、行幸の時前後を警衞する職で、四部官(督、佐、尉、志、)ある。

*ぶゑつ　蝦夷退治の斧鉞を給はる條(百合若)

〔斧鉞〕をの・まさかり。連文釋義に、「戚爲レ斧、揚爲レ鉞、斧小二于鉞一、鉞大二于斧一」。

ぶんかふ　大高にお菓子さまざまぶんかふに盛入れ(丹波與作)

〔文匣〕黑川道祐編・雍州府志・七、土産門に、「文匣。以レ紙貼二宮之內外一、塗二漆於其上一、或盛二書册一或藏二雜品紙一、是稱二文匣一」。文匣に大高(その條を見よ)を敷いて、その上に種々な菓子を盛入れたのである。

*ぶんごむめ　國の名も心の花の豐後梅、眞野(まの)の長者の祕藏子の玉世の姫(用明天皇)

〔豐後梅〕梅の一種。松岡玄達選・梅品に「鶴頂梅、和名ブンゴムメ。謹按ルニ花八重大輪、ツボミ鮮紅ニシテ開ケバ瓣ノマハリ薄紅、實甚ダ大ニシテ味美ナリ、又單瓣アリ、實黃白ニシテ、紅暈有テ鶴頂ノ紅色ニ似タリ、豐後ヨリ出ル京畿ニ多クアルトハ異也、花瓣甚豐カニシテ美シク至テ大輪ナリ」。巢林子のこの文は、國の豐後に豐後梅をいひかけた。

ぶんざう　油のついでに油屋の女房殺、酒屋に仕替へて幸左衞門がするげな、殺手は文藏憎いげな(女殺)

〔文藏〕佐川文藏を云ふ。大阪の俳優で、享保初年から敵役として賣出し、享保三四年頃は位付上上となり、上上吉まで昇進したが、享保八年以後は其名が見えない。役者金化粧(享保四年刊)敵役之部に、「佐川文藏。上上、近年つき出しの惡人、めつたによいよいとの噂も七十五日では止むといへど、いかにもようござんすが少し不精に見えます、お心を付け給へ」。女殺油地獄の登場された享保六年に於ける佐川文藏は、竹島幸左衞門の座本であつた大阪吉左衞門町中座の敵役として勤め、年齡二十七であつた。

ふんざうえ　大の法師ふんざうえの高からげ、鐵鉢ささげ錫杖つき(井筒)

〔糞掃衣〕比丘の被る衣をいふ。衆人の掃棄した弊衣を拾納して作るが故に糞掃衣といふ。四分律に「捨二檀越施衣一、著二糞掃衣一」。

ぶんしん・たほう　ぶん身たほう八十萬億の大菩薩(釋迦)

〔分身・多寶〕分身佛・多寶佛をいふ。分身佛とは、一の佛菩薩の身を分ち形を變じて化現せる佛菩薩をいひ、多寶佛とは、分身せざる佛をいふ。

ぶんせんわう　文宣王は大野に狩して麒麟を得(百日曾我)　文宣王は陽虎なりとて捕はれ(天神記)

〔文宣王〕孔丘(卽ち孔子)の諡號である。「文宣王は大野に狩して云云」に就ては、「孔子は魯國の狩に麒麟を得られし」を見よ。天神記のこの文は、魯の陽虎と云ふ者が嘗て匡で惡事をなしたことがあつた、孔子が陳へ適(ゆ)かうとして匡を過ぎる際、匡人が孔子の貌の陽虎(とら)に似てゐるので、人誤りをして孔子を拘へたのである。十八史略・卷之一に、「(孔子)適レ衞將レ適レ陳過レ匡、匡人嘗爲二陽虎所一レ暴、孔子貌類二陽虎一、止レ之」。

*ふんだりげ　芬陀利華・摩訶芬陀利華咲亂れ(釋迦)

〔芬陀利華〕梵語 Pundarika. 白蓮華と譯し、印度最優等の花である。

*ぶんだん　娑婆分段の凡身には、恩あり仇あり貧福あり(百日曾我)

〔分段〕六道の衆生がその業力に隨つて感ずる果報に分限形段がある。卽ち身丈に長短、壽命に長夭あるが如きである。衆生は皆同じ娑婆に住して生死流轉するによつてこれを分段同居といふ。成唯識論に、「分段生死、謂二諸有漏善不善業一、由二煩惱障緣一、助二勢力所一レ感、三界麁異熟果、身命短長隨二因緣力一、有二定齊限一、故名二分段一」。

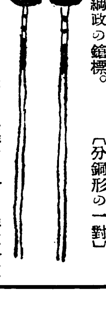
*ふんじがる　無體に取つて行くべいと、ふんじがつてぞ立つたりけり(伊豆日記)

踏反(ふんぞ)り開(はた)がるの義。足を踏開いてうしろへ反る。錦文流撰・傾城八花形に、「伏屋を圍ひ繩切り捨て、ふんじがつたる有樣は勢勝れて恐ろしく」。

ふんどう　京者の正眞、お屋敷方は新分銅、譬になまりは交られど(薩摩歌)　分銅形の一對は備前の岡山(薩摩歌)

〔分銅〕古昔金銀塊を秤の權(おもり)(法馬)形に鑄造し置いて、不時の費用を要する時通貨に改鑄するに充てたもので、豐臣秀吉が黃金の分銅を造つて大阪城に貯へたのに始まるといふ、萬治二年には金分銅銀分銅を造つたが、元祿中には金銀分銅を通貨に改鑄されて、正德頃には既に一枚も存せなかつたといふ。巢林子のここの文は、お屋敷方には新參を分銅にいひかけて新分銅というたのである。「分銅形の一對」は、備前岡山の城主・池田伊豫守綱政の鎗標。

〔分銅形の一對〕



ぶんない　口狹く奧廣く分內廣大なりとかや(大原問答)

〔分內〕領分內の義。轉じて場處の意にいふ。源平盛衰記・宇治川の先陣の條にも、分內を場處の意に用ゐてある。

*ふんばり　ふんばりめ血迷うて何ぬかす(大經師)　ヤイふんばりめ慮外な、それ何ぬかす(弘徽殿)

女を罵詈していふ。按じろに踏張(ふんばり)で剛愎の義

より、女を罵る稱になつたのであらう。(或は糞尿であつて、糞垂れ小便垂れの意より女を罵る稱になつたものか)。「ふんばり」は「ふりばり」ともいふ、蓋し「ふんばり」の「ん」が末音の「り」に引かれて「ふりばり」と轉訛したので、「がにはり」を「がりはり」といへる類である。俚言集覽に「江戸にて賤しき妓女を罵りてふんば女と言」とあれども、紅白源氏物語などにもこの語の見えてゐるから、京阪地方でもかなり古くから用ゐた語である。

ぶんぷくちやがま (隅田川)

〔文福茶釜〕上野國館林の茂林寺の僧守鶴の持つてゐた釜で、一度水をさせば數日間ぶんぷくぶんぷくと沸返るといふ。俚言集覽に、「本朝俗談志に、上野國館林茂林寺に狸の化せし守鶴といふ僧、住職七代の間納所せしとき、釜を調せしことを記して曰く、此釜を菴豎の圍爐裏にかけ置き、一度水をさせば五七日がほど涌出で、水をさす事なし、常にぶんぶくぶんぶくと沸きける。守鶴生をあらはしければ、此釜のぬしは毛が生たりと人々いひあへり」。

ぶんや (天網島)

〔文彌〕岡本文彌が語り創めた哀婉な調の淨瑠璃節。聲曲類纂に、「大阪・岡本文彌。山本土佐掾が門人と云、天和貞享の頃にや、伊藤出羽掾が芝居に於て一流を語り弘めしかば、文彌節と號して浪花中にもてはやしぬ」。

へ

***へいきん** 源の貞世入道了俊は、往時應安年中に鎭西の探題に補せられ、菊池が餘族をへいきんし武功他に越え(今川了俊) 日本武尊と稱し奉り、九州既に平きんの由帝都に注進ありしより(日本武尊) この男子唐土に押渡り、大明韃靼を平均し異國本朝に名を揚げし(國性爺)

〔平均〕平定。

へいぐわい どなたも船中平ぐわい御免、よいお近付もとめしと禮儀仕舞へば(博多)

〔平懷〕憚らないで平氣なこと。無遠慮。饅頭屋本・節用集及び易林本・節用集に、「平懷」。和訓栞に、「へいくわい。三代實錄に尋常平懷之時人天眼目に平懷常實と見えたり、敬意なき意にいふも通へり」。

***へいぢもん** へいぢもんに身を寄せて、うかと見入りておはしける(小栗判官) 跡を慕うて門に入り、へいぢ門よりさしのぞけば(用明天皇)

〔屛中門〕表門と母屋との間にある門。中門。

へいれい へいれい白丁退紅白丁(最明寺殿)

〔平禮〕用明天皇職人鑑・職人盡しの條に、「繼に心や揉烏帽子、へいらい小結梨子打や」とありて、「へいれい」は「へいらい」ともいひ、また「ひれ」ともいふ。「ひれ」を見よ。

へうたんいか 鰻瓢簞鯰いか(氷朔日)

〔瓢簞凧〕瓢簞の形した紙鳶。元祿寶永頃流行した紙鳶にはかかる奇形の物が多かつた。(序云、瓢と簞とは別物で、瓢はひさご、簞は竹のくみ籠で食物を入れる物であるが、朗詠集に「瓢簞屢空」と見えてゐるより合せ呼んで瓢のことをいふやうになつたといふ)。

べうのゆもと 空を慕ひて鳴く犬の、べうの湯元はあれとかや(二枚繪草紙)(用明天皇)

犬の吠聲「べう」に「べふ」(別府)をいひかけて、「べうの湯元」というたのである。犬の吠える聲を「べう」と云うた例は、狂言記・犬山伏などの中にも見えてゐる。別府は豐後國速見郡にある有名な溫泉地。

べうもく ますらは其儘べうもくとなり(用明天皇)

〔眇目〕すがめ。隻眼。

***べかこ** 千兩道具の娘を二十兩の目くさり金で女房に持たうとや、べかこまあなるまい(女腹切) 手をたたいてほつほらほ、こちや知らぬ、あべかこの新介と、走つて内へ駈込めば(壽門松)

「目赤く」を音便によつて轉じて「めかかう」といひ、更に「べかこ」と訛つた語。現今では「あかんべい」といふ。小兒が下眶を指で引下げ、裏の赤いのを見せていふ語。小兒ならずとも不承諾の意にいふ。大鏡に「めかかうしてちごをおどせば」。壽門松に「あべかこの新介」とある「あ」は感動詞である。そして東海道の名物に「安倍川の糝粉」といふがあるから、それをもぢつて新介と人名にしてつづけたのである。國花萬葉記・卷八、駿河國中名物出所之部に「餅＝あべ川の茶屋にて往來の旅人に賣る也、風味海道の名物」と見えてゐる。

***へきしよ** 御年寄衆・御小姓の外、召もなきには御座の前參らぬ筈の御壁書(加增曾我)

〔壁書〕張紙にした法令。壁書はもとかべがきの義である。太平廣記・謝自然傳に、「二天神衞二其門屛一、如二今壁書一」。

へきり 間のへきりを小楯にて時分を窺へ、サア來いと(博多)

〔部切〕船内を仕切つた板。和漢船用集卷五に、「部切舟＝糞をいるるに幾間も仕切あるの名なり、此ゆゑに間船とも云」と見えてゐる。部切の義これで明かである。

べくのみ 押へぬ盃飲まぬ毒、下に置かずのべく飲みや、浦島飲みはあけろこと法度にしての潮干飲み(加增曾我)

〔可飮〕可の字を助動詞に用ゐる時に漢文では可レ致、可レ被レ下などと書いて、上に置くによつて、注いだ酒盃は下に置かないで直に飲むと云ふ洒落言葉である。またこの要求に應じて作つた可盃といふもあつた。爲井童章(寶永二年刊 詩繪雛形本)に、可盃 を畫きて、「丁形、下に置かぬといふ心にて可といふ也」と見え、醒睡笑に「べく盃を戲れに夏菊と名づけてこそ候へ、その故は霜(下にいひかく)に置かれねば」と見え、また嬉遊笑覽卷十上に雅筵醉狂集を引いて、「盃の底に細き穴をあけて、指を以てその穴を塞ぎて酒を盛らしむ、仍て飮盡さねば下に置かれぬなり、可字は文章の上に有て下に置かざる字ゆゑ、俗に可杯と名付け用ゆ」と見え、西鶴俗つれづれ卷一にも、「可さかづきの後皆皆氣つよくなりて、男達の咄に云々」と見えてゐる。

へこむ 食込んだかへこんだか、女夫の中の榮耀遣ひか(重井筒)

〔凹〕失敗して損をする。和訓栞に、「へこむ。俗語なり、減籠の義也」。巣林子のこの文、「食込む」と韻脚を合せた文飾である。

べつかつの冠 阿克將が出立は纓綱の赤裝束、べつかつの冠着たり(國性爺後日)

「べつかつ」は韎韐の誤用であらう。昔韎韐と